

パソコンの寿命

1) XPの余命

Microsoft Windows XP (マイクロソフト ウィンドウズ エクスペー) は、マイクロソフトが 2001 年に発表した PC 用 OS であり、2008 年 2 月現在、最も利用者の多い OS でもある。

それまでやや安定性に欠けるところが多かった、ウィンドウズ 9 x 系の PC は業務用の NT 系と一体化して非常に安定度が高まり、セキュリティ対策のサービスパック、SP-1~3 の補強をも得ながら依然として高い人気を誇っている。

この XP も、パソコンにプリインストールされた形としては、2008 年 6 月 30 日を以て販売を終了することになっている。

愈々ウィンドウズは XP から VISTA に移行するということなのか!?

だが、マイクロソフトの対応はここへ来てまたまた微妙になっているようだ。

2007 年初めに登場した VISTA はマルチメディア重視の OS として満を持して登場したのだが、今ひとつユーザーの支持を得られておらず、マイクロソフトは異例とも云うべき XP 販売及びそのサポート期限の延長、再延長を余儀なくされているのである。

かく云う私も 2002 年 10 月購入の XP と、2007 年 4 月の VISTA とを併用しているものの、主力機器としては断然 XP となっているのは、XP の方が使い勝手がよい、逆に VISTA にはこれというメリットが見出せないからなのだが、それではこの XP が果たして余命幾許かと考えることが多くなっていることも認めざるを得ない。

今回は XP の余命を占いながら、一般的なパソコンの寿命というものを考える。

註： XP のサポートサイクル

2007 年 1 月 25 日、マイクロソフトは Windows XP(Home)について、2009 年 4 月から 2014 年 4 月まで 5 年間の延長サポートフェーズを提供すると発表した。

これは、次代 OS の Windows Vista の一部のエディションより 2 年長い。

ただし、延長サポートフェーズはメインストリームサポートフェーズとは違い、セキュリティ関係以外のアップデートはなく、無償サポートも受けられなくなる。

2) パソコンの寿命とは

税法上では、パソコンの減価償却期間は4年となっており、長期保証も通常は5年までとされています。

一般的にはパソコンの寿命はユーザーにより異なるとは云え、5年～10年というのが常識ですが、どうしてこのように幅があるのでしょうか？

イ) 物理的寿命

単純に考えても精密機械であるパソコンは当然のことながら5年くらいでアウトというところでしょう。

壊れやすいのは回転部分—ディスク・ドライブ・・・パソコン・ユーザーが最初に恐れおののくのはハードディスク・クラッシュです。

またフロッピー・ディスク、CD/DVDドライブも回転機器でありますから、同様に壊れやすい部分と考えるべきでしょう。

心臓と云うべきCPUは、冷却ファンは回転機器ではありますが、CPU本体は壊れやすい機器とは云えません。

またその他の主要機器たるマザーボード、メモリーなどは動かない部品ですから、殆んど損壊しないと考えていいでしょう。

またパソコンは筐体を開けて見ればすぐ理解できるように、沢山の部品をアッセンブルした機器ですから、部品交換は可能であり、一部の損傷が本体すべてをギブアップせねばならないというわけではなく、この意味でも存外長期間の使用が可能です。

以上のことから考えれば、パソコンは丁寧に使えば結構長持ちするマシンと云えると思いますが、問題はパソコンは家電品とは異なり、その寿命については単純にフィジカルな問題ばかりでは計れないという事です。

ロ) ソフト的な老朽化

パソコンの寿命を考える時、取得時点の性能が経年劣化することは絶対にはないのですが、時代遅れの性能になることは必定ですし、OSの改変周期からみても、パソコンはだいたい5年で老朽化してしまう、つまり時代遅れになるとみていいでしょう。

パソコン及びその周辺機器、回線速度、諸々のソフトウェアは進化の速度が非

常に早いという特徴があり、ユーザーはどうしても新しい機能に目を奪われてしまうことは避けがたいことです。

そして、ユーザーが守旧派である場合は、後生大事に古いマシンを使い続けることは可能ですが、どうしても進化に沿って利用方法や内容が変化して来ると、それに応じてパソコン本体のライフサイクルもまた短くなることは避けがたい宿命なのです。

まあ、パソコンはこれだけ使ったから買い替えなさいというルールなんてありません。ただ、一般的にビジネスアプリケーションやネット、メールといった用途ならば4～5年、ゲームやDTPなど最新技術や高い処理能力を必要とする作業が主な用途の場合は、3年程度が買い替えの目安と云えるでしょう。

パソコンを長持ちさせる3つの方法

パソコンを生き物のように扱う？

パソコンをお持ちの方で、ご自身のパソコンの「健康状態」に気を使っている方はどれだけいるでしょうか。「健康」などと書くと「いったい何を言っているんだ？」と思われる方もいるでしょう。しかしパソコンの状態を良くしようとすると、まるで「生き物」のように扱う必要があることがわかるのです。



これが生き物？

もちろん「うちのパソコンは何もしなくてもちゃんと動いてるよ？」とおっしゃる方もいるでしょう。しかしパソコンの発するメッセージに耳を傾け、ちょっと気を使ってあげるだけでパソコンの寿命が延びるとしたらどうでしょうか？人間やペットなどの生き物と同じように、パソコンもケアをすることで寿命を延ばすことができます。

■熱いところは苦手です

■精密機器なので、ホコリは苦手です

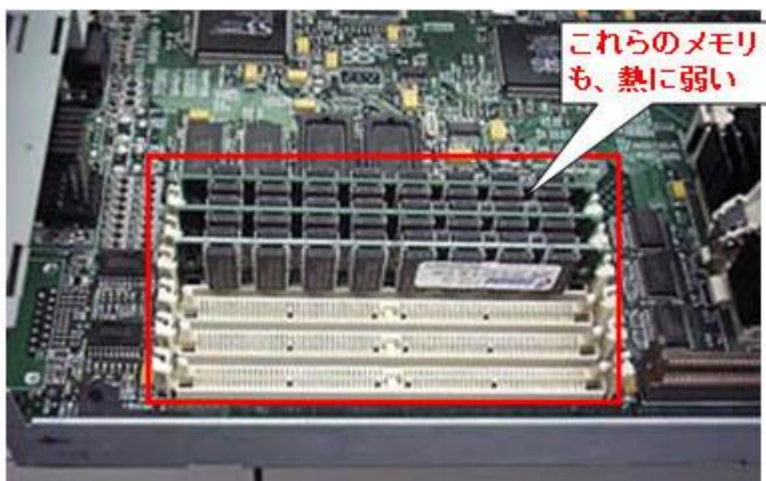
■考えているときは待ってあげましょう

熱いところは苦手です

「フーン」とか、「ブーン」とか、そんなかすかな音がパソコンから聞こえませんか？パソコンは熱を発生する部品が多く使われているので、ほとんどのパソコンで部品を冷やすファン（扇風機）がいくつも動いています。

高性能なものでは「水冷」と呼ばれる、液体で部品を冷やす仕組みでのものや、一部のノートパソコンなどではファンがまったく無いものもありますが、それでも大量の熱が発生していることに変わりはありません。ノートパソコンをお使いの方なら、置いてあった場所がとても熱くなっていて、その熱さにびっくりされた経験があるでしょう。

さらに、パソコン内部の温度が上がると、なんと CPU などの処理速度が低下して性能が落ちてしまいます。そして何よりも、熱によって部品の寿命が短くなってしまいます。



メモリも熱にそれほど強くない。放熱性が悪いノートパソコンを使っている方は気をつけたほうがよい。

この対策としては、デスクトップ型なら直射日光の当たる場所や冷房の当たりにくい場所は避けて、風通しの良い日のあたらない場所におきましょう。設置場所の変更が出来ない場合、夏場などは扇風機を当ててあげるのもひとつの方法です。人間が涼んでいるときには、パソコンも涼ませてあげましょう。

また、ノートパソコンは本体を冷やす様々なアクセサリが販売されていますので、それを使うと良いでしょう。

ただし、冷えるからといってアイスノンなど強力に冷えるものは絶対に使わないでください。冷えすぎて内部で結露してしまうと、最悪の場合パソコンが壊れてしまいます。精密部品の塊なので、冷やすときにもやさしく冷やしてあげてくださいね。

精密機器なので、ホコリは苦手なんです

パソコンは精密機器の部品の塊です。ホコリが進入すると異常な電流が流れやすくなり、壊れるまではいかないまでもダメージを与えてしまいます。また、ホコリが積もれば熱を持ちやすくなるので前のページで紹介したような熱の影響を受けやすくなってしまいます。

対策はいたって簡単です。デスクトップなどの据え置き型のパソコンなら、定

期的にパソコンの周りを掃除してあげてください。私もそうですが、部屋のかどにパソコンを置いてあるような場合では背面にホコリがたまりやすく、そのホコリを吸い込んでしまう可能性が高くなります。

もちろん、パソコンの外箱を開けられるならば、内部にたまったホコリをエアダスターのようなものでシュッと吹いてあげるとなお良いでしょう。

それから、キーボードは「ホコリ」がたまりやすい形をしていますがこれも実は悪影響を与えます。これもホコリをエアダスターで吹き飛ばすか、ハンディタイプの吸い込む力が強くない掃除機でほこりを吸い取ってあげると快適になりますよ。

ノート型の場合ならそれほど対策は必要ありませんが、風の強い日に外で使うときなどは放熱用のスリットからごみが入りやすいので気をつけてください。

結局、人間や生き物にとって良くない環境はパソコンにも良くない状況と考えてください。使用する人間が快適な環境なら、パソコンにとっても快適な環境なのです。

急がせると大変なのは、人間だけじゃありません

考えているときは待ってあげましょう

パソコンは人間と違い（違わない方もいますが）、サボる事はありません。命令はすべて受け、実行します。しかし、条件によっては処理に時間がかかることはあります。

たとえばインターネットをしているときに画面が切り替わらなくなったら、受信するデータ待ちの状態になっていることがほとんどです。この時にマウスをカチカチとクリックすると命令がどンドンたまるので、すべての命令を実行しようとしてパソコンの処理が遅くなってしまいます。もちろんそんな状態ではパソコンに負担がかかってしまいます。

その他にも、いくつかの処理を同時に行わせると急激に処理が遅くなる場合があります。もし「カリカリ・・・」とか、「チチチ・・・」など、動作音がして

いるときにはハードディスクの書き込みと読み出しで処理が遅くなっています。

これはメモリが足りなくなつてハードディスクをメモリ代わりに使うので、ハードディスクを使えばなしになってしまいます。処理が遅くなつたときに、ハードディスクのアクセスランプが光りっぱなしになっていたら、メモリが足りない証拠です。ある意味、パソコンが悲鳴を上げていると思ってください。

日常的にハードディスクのアクセスランプが光りっぱなしになっている方は、パソコンのメモリ増設をお勧めします。そしてこれを人間に例えると、日々残業が必要なほど仕事をしている状態と同じです。そうしたらくたびれてしまいますし、体調だって悪くなりやすいですよ？

このように、パソコンの状態を良く保つためには人間に置き換えて考え、「健康」に保ってあげればよいのです。早速今日からあなたのパソコンをいたわってあげてくださいね。

3) パソコンの寿命についての日常ケア

主なメンテナンスはたった2つだけ！

『メンテナンス』というとなかなか難しく、面倒くさいことをしなければいけないのか？というような感じがします。

でも、実際にする作業はたった2種類で、数回クリックするだけです。あとはパソコンが勝手にメンテナンスをしてくれるんですよ。

【 チェックディスクの仕方 】

《 Windows2000,XP の場合 》

マイコンピユータのアイコン

↓ ダブルクリック

マイコンピユータの中の画面

↓ ローカルディスク (C:) を

↓ 右クリック→メニューの『プロパティ』をクリック

ローカルディスク (C:) のプロパティの画面

- ↓ 『ツール』 タブをクリック
- ローカルディスク (C:) のプロパティのツール画面
- ↓ エラーチェックの『チェックする』 ボタンをクリック
- チェックディスクの画面
- ↓ 『ファイルシステムエラーを自動的に修復する』 と
- ↓ 『不良なセクタをスキャンし、回復する』 にチェックを入れ
- ↓ 『開始ボタン』 をクリックする
- 『次回のシステム再起動時にこのディスクの検査をスケジュールしますか?』 と聞かれるので『はい』 をクリックする
- ↓ 『スタート』 ボタンを押しシャットダウンを選ぶ
- ↓ 『再起動』 を選択して OK を押す

再起動すると、起動時にチェックディスクが始まります。
ディスクの容量によりチェックの時間に差がでますが、
短くて10分前後、長くて30分くらいかかります。

【 デフラグの仕方 】

『デフラグ』は『最適化』とも言われます。

《 Windows2000,XP の場合 》

- マイコンピュータのアイコン
- ↓ ダブルクリック
- マイコンピュータの中の画面
- ↓ ローカルディスク (C:) を
- ↓ 右クリック→メニューの『プロパティ』 をクリック
- ローカルディスク (C:) のプロパティの画面
- ↓ 『ツール』 タブをクリック
- ローカルディスク (C:) のプロパティのツール画面
- ↓ 最適化の『最適化する』 ボタンをクリック
- ディスク デフラグ ツール画面
- ↓ 『最適化』 ボタンを押す
- ↓ (複数ドライブがある場合、最適化したいドライブを選ぶ)
- ↓ (通常は、Cドライブ)

『デフラグ』がスタート

『デフラグ』がスタートすると、画面に色グラフのようなものが表れます。これが現在のハードディスクの状態を示しています。緑色のもの、青色のものは気にする必要はありませんが、何割か赤色の部分が表れると思います。

(WindowsXP,2000のみ。98は『詳細表示』ボタンをクリックするとデフラグの処理状況を見ることができます。)

これは断片化されたデータ(ゴミみたいなデータ)(※1)でそれ自体有害なものではないのですが、放っておいてこれが増えた場合、パソコンの調子が悪くなる原因になります。

『デフラグ』は、作業が完了した際に処理前の状況と処理後の状況の両方見れるようになってますので、処理が完了した時に赤い部分がなくなっている、または減っているのがわかるはずです。